

# 2007年度 事業報告

## 村落植林活動

表1【小規模苗畑グループ活動実績】

単位：本

グループ名	植林 (ha)	販売	配布	枯死	育苗中	合計※	備考
TEACA	3,392 (2.12)	768	1,837	10	7,595	12,677	
Olimo	732 (0.46)	1,274	721	72	1,538	4,337	小学校苗畑
Fumvuhu	3,278 (2.05)	200	1,505	50	708	5,639	小学校苗畑
Kidia	2,946 (1.84)	299	1,556	116	1,181	5,084	女性グループ
Foyeni	847 (0.53)	450	2,707	0	2,289	3,467	女性グループ
Kiranga	184 (0.12)	60	156	0	365	682	女性グループ
Magereza	15,214 (2.23)	22,965	12,081	9,274	55,704	13,235	
Sambarai	1,595 (1.00)	3,340	2,571	141	982	8,629	
Msufini	50 (0.03)	47	55	34	0	115	Riata小学校含む
Meru	1,028 (0.64)	2,788	4,354	328	1,547	9,930	4グループの合計
D S M	0 (0)	23,878	0	530	1,862	24,510	Bagamoyoを含む
合計	29,266 (11.02)	56,069	27,543	10,555	73,771	147,862	

※合計数は、前年度の苗木残数を差し引いた当年度の実育苗数

### 1. 苗畑グループ支援

2007年度もタンザニアの3州（キリマンジャロ州／アルーシャ州／ダルエスサラーム州、図1）において、計11カ所の苗畑グループ（表1）に対する村落植林活動協力を継続実施した。

ここ数年、種子調達しているNational Seed Bank（モロゴロ）の種子品質が悪く、低発芽率によって各苗畑グループの育苗計画に大きな支障を来している。2007年度の育苗総数は約15万本であったが、これは計画の70%程度に留まるものである。今後何らかの手だてを講じないと毎年苦しめられることになりそうであり、対応に苦慮している。

各苗畑グループによって取り組まれた植林は、以下の通りとなっている。

#### ・TEACA、Olimo、Foyeni、Kiranga苗畑

キリマンジャロ山の裸地化した森林保護区への森林回復のための植林

#### ・Fumvuhu、Kidia苗畑

キリマンジャロ山麓の住民の生活圏における土地利用者植林

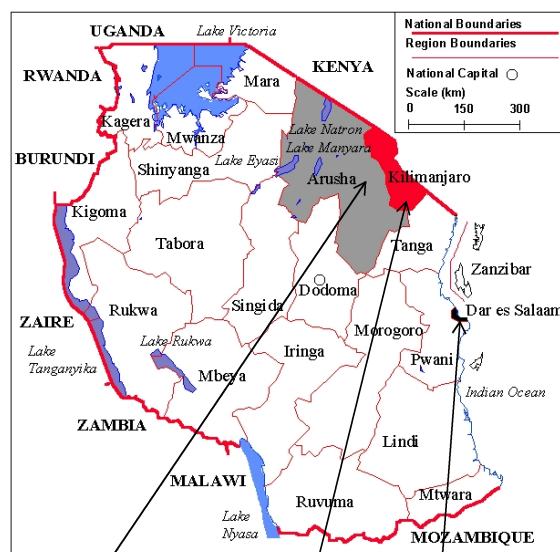
#### ・Magereza、Sambarai、Msufini苗畑

半乾燥地及び地元中学校との共同植林

#### ・Meru苗畑グループ

アルーシャ州メルレー山麓において、Mbolele、Urisho、Songoro、Mwangazaの4グループ共同による、ソングロ丘の森林回復のための植林。

図1【植林を実施している3州位置図】



アルーシャ州

キリマンジャロ州

ダルエスサラーム州

### ・ダルエスサラーム苗畑

テゲタ市マブウェパンデ植林地に対する、受託植林。

## 2. オールドモシ土地利用者植林

尾根全体が丸裸となっているオールドモシ地区は、キリマンジャロ山麓における植林活動の主力地となっている。同地における植林では、地元のFumvuhu小学校苗畑とKidia女性グループ苗畑が、協力して苗木生産に取り組んでいる。

生活圏での植林となるオールドモシでは、近隣住民の積極的な関与が欠かせない。2007年度はこれまでの苗畑グループ主導による植林から、従来以上に村（キディア村）との連携を強め、徐々に「村の取り組み」としての植林活動に移管する方向性を打ち出した。

植林そのものも村側にとりまとめ役を担ってもらい、出稼ぎなど、不在利用者の存在による歯抜け植林の防止などに、きめ細かく対応した。

但し土地利用者植林でも種子の発芽不良は大きく影響し、村人へのニーズ調査に基づく苗木供給が出来ず、大幅な樹種変更が必要となった。

## 3. バガモヨ新規受託植林事業調査

ダルエスサラーム州マブウェパンデ植林地での受託植林事業は、今後補植を除いて2007年度でほぼ完了した。

1997年にテゲタ市に苗畑を開設して以来、足かけ10年にわたって運営されてきたダルエスサラーム苗畑は、これで基本的にその役目を終えることになる。

マブウェパンデでの植林は1998年からの実施であるが、その間に植えられたチークを主力とする苗木は全部で10万本近くになる。大きなものはすでに樹高10m近くに育っている。

2007年度は、ダルエスサラームを拠点とした事業継続の可能性を見極めるため、隣のプワニ州バガモヨにおける新規植林事業の形成調査を実施した。

調査対象としたマクルング植林地は、総面積4,454ha。このうち2,584haが植林の対象となる。付近は牛などの放牧エリアと重なっており、植えた苗木が根付くか、植林後の管理をどうするかなどの難題は多い。

事業実施に当たっては、TEACAは苗木供給と植林指導を分担とする方向性で詰めているが、契約面での調整がついておらず、2007年度はそれ以上の具体的進展は図れなかった。

## 活動の自立

### 1. グループ積み立て

各苗畑グループの自己資金は、主に苗木販売による収入に頼っている。しかし市場アクセスの悪いグループは苗木販売にも限界があること、また比較的コンスタントに苗木販売ができるグループでも、販売収入をグループ内で配分してしまうことから、なかなかグループの自立に結びつかない現実があった。

そこで2007年度は、初めての試みとしてグループ内積み立ての実施に踏み切った。これはグループのメンバーが毎月500シリングもしくは1,000シリングの積み立て（そのいずれにするかはグループで選択）を行うもので、毎月少額ずつ地道に積み立てをしていくことで、少しでも自分たちの活動維持に役立てられる資金を確保すること、またそれを原資に、新たな事業に取り組めるようにすることを目的としている。

小学校苗畑などは積み立ての対象から除いたため、残る7苗畑グループが対象となった。

2007年度は積み立てに対する合意形成および口座開設、テストランの順で実施した。積み立てに関してはすべてのグループが同意したものの、テストラン段階でFoyeni女性グループのみが未実施となった。

グループ積み立てを軌道に乗せるには、この1年の実施を通してのグループメンバーの意識調査と、問題点の洗い出しをした上で、継続性、実効性のある仕組みとして確立していく必要がある。

### 2. 養蜂

#### (1) 低地養蜂事業（モン県Kahe事業地）

##### ・事業集約化（養蜂小屋の建設）

養蜂箱を集中設置し、内検の効率化を図ることを目的とした養蜂小屋の建設を完了した。

これにより、養蜂箱が分散設置されていた頃に比べ、内検効率は飛躍的に改善されることとなった。

##### ・ラングストース改良養蜂箱の導入完了

従来のNjiroタイプ及びバンカータイプ改良養蜂箱から、可動巣枠を備えたラングストース改良養蜂箱への全面切替（12箱）を完了。地元技術での制作が暗礁に乗り上げていた隔王板も、自転車のスポークを利用することで現地調達の見処をつけることが出来た。

- ・蜜源樹植林継続実施  
Kahe養蜂事業地における蜜源樹Callistemon Speciosusの植林を引き続き実施した。一方、苗木の調達が出来れば実施したかったCordia Abyssinicaの植林は、結局苗木の調達が出来なかった。

## (2) 高地養蜂事業 (テーマ村)

ハリナシバチ養蜂の近代化・集中設置を可能とするための改良養蜂箱の増設を実施した。これで従来の2箱に加え、計6箱の改良養蜂箱が設置されたことになる。伝統養蜂箱と合わせた総設置数は13箱で、このうち12箱で営巣しており、着実に収量増に結びつきつつある。

## 3. 養魚池

- ・TEACA事務所の建設にともない、2006年度に新事務所脇に造成した養魚池は、2007年度に1回の漁獲、販売をしたものの、森林保護区にわずかにはみ出していることが分かり、中止のやむなきに至った。その後新たな用地確保の目処が立っていないことから、当面再開できる見込みがない。
- ・一方、キリマンジャロ山麓のオリモ小学校に新たな養魚池を造成し、テラピアの稚魚200匹を放流した。子どもたちが毎日餌やりなどの世話をしており、販売収入は学校の備品購入費など、学校の運営費として役立てられる。

## 4. 穀物貯蔵

タンザニア全土での物価高騰にともない、TEACAの貯蔵する安価なメイズ（モロコシ）への村人たちのニーズは高く、貯蔵する7.5tのほぼ全量を販売した。

## 生活改善

### 1. 改良カマド普及

#### (1) カマド職人の養成

2007年度は、改良カマドの設置主体を従来のTEACA主導によるものから、徐々に各地域主導によるものへと移す活動に取り組んだ。

そのため、地元でのカマド職人の養成に注力し、キリマンジャロ山麓ではこれまでのテーマ村を離れキディア村で、また半乾燥地での普及を促進するため、キリマンジャロ山の東方約50

キロに位置する半乾燥地マワングェニ村で職人の養成を行った。

職人の技術指導にあたり、それぞれの村で7基のカマドを設置した。

#### (2) 土製カマドの再試行

改良カマド普及のネックとなっている、セメントプラスタリングによる設置コストの低減を図るため、山岳部では調達困難な焼成煉瓦用の土を使わないカマドの試作に再度取り組んだ。

これは地元で手に入る普通の土に草を鋤込む方法をとるものであったが、残念ながら良い結果を得るには至らなかった。

## 2. 野菜省水農法

省水農法は現地で“スクマウイキ”と呼ばれる緑葉野菜を、麻袋等の袋（高さ120cm、口径60cm）を使って集約的に栽培する方法。

改良カマドと合わせ、半乾燥地での普及を図るため、マワングェニ村で村の女性たち30名を対象として設置技術の指導とセミナーを開催した。省水農法に対する女性たちの関心は非常に高く、質問も多く出された。

一方、学校への設置としては初となったリアタ小学校では、2回の野菜収穫ができたものの、学校の休み期間中に放牧の牛が進入し、食べられてしまった。食害防止用にトゲのある灌木で囲っておいたが、取えなく突破されてしまった。

### 3. 小学校への牛乳配布

ナティロ診療所への薬剤支援が一段落したため、子どもたちの栄養改善を目的として新たに小学校での牛乳配布に取り組んだ。

実施したのはキリマンジャロ山麓にあるオリモ小学校（全校生徒300名）。週2回、昼食時間に、全校生徒を対象に配布を実施した。

これは最近の諸物価の高騰からくる生活苦、コーヒー栽培による収入の減少などから、各家庭から持ってくることになっている学校給食用のメイズやマハラゲ（豆）を提供できない家庭が増えており、給食への影響が出ていることへの対策として実施を決定したものの。

## 4. コーヒー農家支援

#### (1) 新品種苗木の栽培技術を移転

これまでコーヒー農家支援としてコーヒー栽培農家グループKIWAKABOメンバーに対する栽培管理道具の支援を実施してきた。しかし2007年度は、グループ全体を裨益する支援を実施する

こととしていた。

そこで、これまでTEACAが実施してきた新品種苗木の養成技術の移転及び苗木生産そのものをKIWAKABOに移管し、今後彼らの力で苗木の確保が図れる方向に踏み出した。

このためKIWAKABOメンバーに対するセミナーの実施と、苗木養成用の特殊苗畑を、挿穂採用母樹園脇に新設した。

ただしまだ完全に手を放せるレベルではないため、当面はTEACAの苗畑担当者が継続指導に当たる必要がある。

## (2)巡回指導用オートバイ支援実施

また今後は、新品種苗木が実際にコーヒー農家である村人たちの畑に植えられていくことになる。そこで畑での具体的な栽培指導が重要となってくるが、コーヒー農家を指導する農業技術指導員には山岳部を移動するための手段がなく、効果的な指導ができずにいた。そこで農業局に対して、巡回指導用のオートバイ1台を支援した。

## 教育支援

### 1. 小学校への文具支援

2007年度も、現地小学校に対する文具支援(ノート、ボールペン、鉛筆)を実施した。

支援したのは、これまでのOlimo、Fumvuhu、Foyeni小学校の3校に、ハイ県の半乾燥地にあるMajengo小学校を加えた計4校。

Majengo小学校は、「子どもたちのスタディツアー」で訪問した際に寄贈したもの。

さらに同じく半乾燥地で植林に取り組んでいるRiata小学校では、熱心に苗木の世話をした生徒5人を選んでもらい、「がんばりました賞」で文房具一式をプレゼントした。

### 2. 子どもたちのスタディツアー支援

小学校の子どもたちに環境を守ることの大切さを学んでもらい、自分たちの国について理解を深めてもらうことを目的として、2008年度も小学校1校(Foyeni小学校)を対象として、スタディツアーを実施した。

参加したのは5年生と6年生の計120名。訪問地は前年度と同じ、ハイ県の半乾燥地とキリマンジャロ国際空港、Magereza苗畑グループ。そしてMajengo小学校との学校交流を行った。

## 3. 図工の授業を実施

タンザニアの小学校には、日本の図画工作にあたる授業がない。そこでオリモ小学校の先生方と協力して、子どもたちに「ものづくり」の楽しさに触れてもらう授業を企画実施した。

授業ではバティック(ろうけつ染め)作りにチャレンジし、シーツの2倍ほどの長さの白布を使って、生徒たちに思い思いのデザインで染め上げてもらった(授業は2回実施)。

この授業には、手工芸品バナナカードの売り上げが活用された。

## 各種研修

### 1. 苗畑グループ対象スタディツアー

2007年度はノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんの主宰する、ケニアの「グリーン・ベルト・ムーブメント」を訪問する予定であった。しかし同国の大統領選後に発生した暴動のため、残念ながら実施を見送らざるを得なかった。

### 2. パソコン研修

2007年度もTEACAリーダーに対するパソコン研修を継続実施した。今回は会計担当のムチャロ氏、プロジェクト担当のンジャウ氏の2名が受講し、これで2006年度に研修を終えている副代表のムチャロ氏と合わせ、リーダー5名のうち3名までがパソコンの基本操作を学んだことになる。

これまで現地からのメールは、手書きしたものをネットカフェのスタッフに打ち込んでもらっていたが、最近ではワードを使って自分たちで送ってくるようになった。

## その他

### 1. 村人を対象とした植林ワークショップ実施

キリマンジャロ山麓のテマ村において、これまでの20年間の植林活動を概観するワークショップを、村人を対象に開催した(参加40名)。

TEACAにはこれまで植林活動の普及、啓蒙にあたって有用なツールが不足していたが、今回パネル約20枚を整備し、植林による植林地の変化など、村人自身が植林活動の成果と効果を分かりやすく理解できるようにした。

## 2007年度 事業報告 <国内事業>

### 国内自主活動(メンバー活動)

#### 1. 手工芸品(カンガバッグ)／菜園活動

「百万回の議論より一つの行動を」を標榜するタンザニア・ポレポレクラブにとって、国内で様々な人たちが自主的に取り組む活動を育て、また、そうした場を提供することにこだわった取り組みをしていくことは、活動と存在の根幹に関わることといえる。

その意味で、現在取り組まれている「手工芸品活動」、「菜園活動」ともに、2007年度は「自主」活動として意識的な取り組みがされた一年であった。それぞれの2007年度の活動状況は以下に示す通りで、ほぼ月例ペースで活動が取り組まれた。

- 手工芸品活動： ミーティング (10回)  
現地調査 (1回)
- 菜園活動： フィールド (10回)  
ミーティング (1回)  
フリーマーケット (1回)

これらの活動については、それぞれに携わるメンバーが、自分たちで話し合いながら活動を推進していける体制がほぼ整いつつある。これまでもミーティングなどは自主運営の体制にあったが、第三者への広報、自己資金調達などの点においては、大きく前進したといえるだろう。

これまでポレポレクラブが担ってきた、自主活動全体を統合する会計管理も、2007年度末をもって各活動への全面移管が完了する。

### 国際協カイベント等

2007年度も以下のイベントに継続参加し、当会の活動についての展示紹介、説明を行った。

- ・4月：「桜まつり」(コーヒー販売、物販)
- ・5月：「アフリカンフェスティバル」  
(活動展示、セミナー、物販)
- ・10月：「グローバルフェスタ」( )
- ・10月：「横浜国際協力フェスティバル」  
(コーヒー販売、セミナー)

前年度から参加を始めたセミナープログラムへも積極的に参加した。ただしこれらのプログラムは、当会の会場における広報不足と、さらにセミナー会場の場所(とくに横浜国際フェスティバル)に問題があり、参加人数が少なく、別の方法を検討する必要があると思われる。

ブースでの活動展示では、植林活動の成果をはっきり示せるように、植林以前の植林地の様子と、現在の様子を見比べられるパネルを整備した。また、菜園活動のパネルも新たにラインアップし、市民による自主的な取り組みの具体的事例として来場者に紹介し、関心を持ってもらえるようにした。

ただし広く来場者に現地の様子を伝え、活動への理解を深めてもらう展示のあり方としては、まだ一貫性に欠けており、決して満足できるレベルとはなっていない。

### 講演会・報告会等

#### 1. 「社員参加型活動報告会」

2007年度は、当会の活動をご支援いただいているリコーテクノシステムズ(株)の「社員参加型活動報告会」に前年度に引き続き参加し、キリマンジャロ山麓での植林活動を、実際に現場で使われている道具などを手に取っていただきながらご報告した。当日は各事業所から50名近くの幹部の方が出席され、熱心に報告を聞いていただいた。

同社からは、活動記録用にデジタルカメラをご寄贈いただいたほか、手工芸品販売、収集活動でもご協力をいただいた。

#### 2. 「タンザニアの子どもたちの絵展」

また、タンザニアの子どもたちの日常を、日本の市民のみなさまにお伝えすることを目的として、JICA帯広が企画した「タンザニアの子どもたちの絵～自分の家・仕事・遊び～」に協力し、約1ヶ月間にわたって、キリマンジャロ山麓オリモ小学校の子どもたちが描いた絵約40枚を展示した。

## 広報活動

### 1. 企業広報

当会ではこれまで、活動広報の対象は個人に限られており、企業に対するアプローチはまったくできていなかった。そこで2007年度は、企業の社会貢献部門を対象として、重点的な活動広報を実施することとしていた。

この方針に基づき、(1)社会貢献活動に熱心な企業1,700社をピックアップし名簿化、(2)当会の独自色を出した社会貢献活動の具体的提案をまとめ、チラシとして作成、(3)同時にホームページに企業向けの項目を追加し、大幅な改訂を加えた。

しかし2007年度はそこまで時間切れとなってしまう、実際の広報実施、改訂版ホームページのアップ作業は次年度に持ち越しとなった。

### 2. メディア掲載／出演

#### (1) 出版物への掲載

- ・Newsweek ('07/10)
- ・JANIC「シナジー」('07/12)

#### (2) 新聞掲載

- ・朝日新聞 ('07/4)
- ・毎日小学生新聞 ('07/10)

#### (3) メディア出演

- ・Bay FM「The Flintstone」('07/5)
- ・FM COCOLO「On the move」('08/1)

## 国際交流事業

### ・キリマンジャロ植林ワークキャンプ

キリマンジャロ山麓テマ村にて通算13回目となる植林ワークキャンプを開催した。

参加者は17名（男性7名、女性10名）。今回のワークキャンプは、村滞在日数がこれまでで最長（14泊15日）となったことから、松林以外にも、村でのボランティア活動など、これまでなかなか取り組むことのできなかったプログラムを組むことが出来た。

一方、隣国ケニアで発生した暴動にともなう行程変更、森林保護区の管轄権移行と住民の締め出しによる植林活動への影響など、これまでにない難しい対応と運営が迫られたワークキャンプでもあった。またワークキャンプ期間中の植林本数は1,109本であった。

## 事務局体制

### 1. 人員体制

2006年度下期より導入した、事務局アルバイト常時3～6名体制をフルで維持した初の年度となった。

この体制は、従来業務遂行型であった事務局アルバイトを、ミッション遂行型に思い切って切替えることを意図して導入したものである。

これにより、従来手をつけることができなかった企業部門へのアプローチ、ホームページの大幅改訂といった広範で大型の取り組みを、事務局アルバイト主導で判断、実行してもらうことができた。これは事務局アルバイトの力なくしてできなかったことといえる。

一方、ミッション遂行型にした場合、アルバイトの採用によっても、日常的な事務局業務の軽減はあまり図られることがなく、結果として事務局は過大な付加を抱え続けたままとなる。

この両者を、どう円滑に、同時並行して前進させていくことが出来るかが、事務局に課された課題だといえる。

## トピック

### 1. 法人会員加入

当会の活動は上記の事務局体制の現状にもある通り、決して満足のものではない。それでもタンザニアにおける10年にわたる地道な取り組みが、社会的にも少しずつ評価されるようになってきている。

2007年度は企業からの問い合わせも相当に多くなり、様々な工夫を凝らした形でご協力いただけるようになってきている。

こうした中、最初に法人会員となっていたいただいた日本たばこ産業(株)（＝タンザニアで村落植林活動に取り組む）に続き、2007年度は紳士靴メーカーのオリエンタルシューズ(株)、レストラン事業を展開する(株)アディックが、新規法人会員として、当会の活動を応援して下さることとなった。

### 2. ネット募金

従来のネット募金Gamba Npo.com、イーココロに加え、Yahooの「壁紙募金」、日立グループの「クリック募金」('08/2まで)が加わった。



---

## タンザニア・ポレポレクラブ

(事務所) 〒154-0016 東京都世田谷区弦巻1-28-15サニタイトハイツ301号室

(Tel/Fax) 03-3439-4847、(郵便振込口座) 00150-7-77254

(E-mail) pole2club@hotmail.com、(HP) <http://polepoleclub.ld.infoseek.co.jp/>

(本部) 〒107-0062 東京都港区南青山6-1-32-103

---